
染まらない風

玲風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

染まらない風

【Nコード】

N8388A

【作者名】

玲風

【あらすじ】

時は室町。世間を騒がす盗賊がいた。その名は『黒風』。ある時彼は一人の姫と出会う。二人の運命は？

風になりたい。彼のような自由な風に・・・

時は室町。今この世には世間を騒がしている盗賊がいる。盗賊なんていっても単身で金持ちの家に忍び込みお宝を盗んでいくコソドロである。

その盗賊を世間はこう呼んでいる。

- 黒風 -

「黒風が屋敷の宝物を盗んだぞ！！そこらにおるはずじゃ！捕らえる！！」

今夜も世間が騒ぎ出す。黒き風によつて・・・

「ふつ。チヨロイな。」

屋根の上には1つの影があった。それは黒く長い髪を高く結った長身の男のものだった。彼こそが黒き盗賊、黒風である。そして、その場から消えていく。羽根のようにしなやかに夜空に消えていく。

「黒風・・・」

夜空の遙か遠くに消えた風を見つめる女性。彼の名をつぶやく。

「今回はつまらなかつたな。守りも手薄だしな。」

黒風が小さな森にフワツと飛び降りた。ここが彼のアジトのような所だ。盗みを終わると必ず戻ってくるのである。すでに彼の周りを

取り巻くのは闇ではなく金色の朝日に変わっていた。

ガサツ

茂みから微かなる物音が聞こえた。黒風は瞬時に反応し、腰に下げている短刀をスツと抜く。

「誰だ？」

たった一言でも凄みがあり、相手は一步退いた。ヒヨイと木に登り、相手は遠くの屋敷に逃げていった。多分黒風を捕まえるのが目的ではないのだろう。

「なんだよ。あいつ。忍びか？それよりこの場所、危ないな。まあなんとかなるか。」

独り言が癖らしく、ブツブツと喋っている。まあ、独り言を言っているのも顔が良いと何も言われないのだろう。

「今夜も仕事をするか。」

黒風は相当のきまぐれで盗む日はその日の気分で決めている。

これから昨夜盗んだ宝を売りに行くらしい。先刻の忍びと同じようにヒヨイツと木に登った。彼もまた忍びの一人と言えよう。そして町に向かった。

黒風が戻ってきたのは、もう陽が沈む頃だった。

「ちようどいい時刻だ。」

それだけ言つてとある屋敷に飛び立った。

「今夜もチヨロイな。」

これで何度この光景が繰り返されたのだろう。黒き風は美しい宝物を手にし、逃げる。もちろん、闇に消えて・・・

「ふう、二夜連続はさすがにきつかったか？」

さらりと流れるように戻ってくる黒風。

「本当にいつもここにおるのだな。」

「!!!」

黒風は驚いた。木の後ろからいきなり女の声が聞こえたのだ。普通は驚くだろう。だが、すぐに冷静になり女の正面に立った。

「なっ、なんで俺がここに来ることを知っている？」

「ある者が教えてくれた。」

淡々と喋る女。黒風ほどの長さの髪を後ろで軽く束ねていた。

「誰・・・今朝の忍びか。なんだ、お前俺を捕らえに来たのか？」

こんな状況でも黒風は笑っていた。その余裕はどこから来るのだろうか。

「そうではない。そなたに・・・逢いたかったのだ。」

少し頬を赤らめた。以前黒風を見ていた女性は彼女だったのだ。黒風はそんな彼女を疑っていた。

「お前は何者だ？その身なりからすると姫か？」

黒風はジッと彼女を見ている。

「そうだ。でも絶対にそなたを捕らえたり、それに協力はしない。

約束する。」

まだ疑っているようだが、黒風はため息をつき

「わかった。一応信じてやる。だが、その『約束』を破ったら・・・

殺す。」

と言った。

「分かっておる。私は柚葉ゆずはと言う。そなたの本当の名は何と言う？」

「佐助さすけ。」

「佐助？案外普通なのだな。『黒風』なんて言うからもっと変わった名を想像していた。」

「・・・お前が勝手にしたことだろ。」

そして毎日柚葉はやってきた。黒風、いや佐助は仕事ができなくて不満らしい。機嫌がそこそこ悪い。

「なあ、佐助。何故『黒風』なのだ？」

寝転がっていた佐助は、めんどくさそうに柚葉を見た。

「なんで今更そんなこと聞くんだよ。関係ないだろう？」

「気になるんだ。しょうがないだろう。」

「ハア・・・とため息をつく。」

「何にも染まらない自由の風なんだよ。黒ってさ何色にも染まらないだろう？だからだよ。俺は何かに縛られたり命令されるのが嫌いなんだ。自由に空をまう風みたいに生きたいんだ。」

「染まらない自由の風？・・・あは、なんだそれ。ハハハ、おかしな理由だな。」

柚葉はかなり笑っている。佐助はカーツと紅くなった。耳まで真っ赤だ。

「わ、笑うな〜！」

怒る佐助。だが、本気ではないはずだ。柚葉はまだ笑っている。大きな声で。

「ハハ、す、すまぬ。でも『自由の風』か。良いな。私も自由になりたいな。」

「さんざん笑つといて言う台詞じゃないだろ。」

佐助はふてくされた。そんな、佐助の髪が春風に揺らされていく。そして柚葉も。

「久しぶりに仕事するか。」

黒風は立ち上がった。

「えっ!?!」

佐助が仕事をすると言っただけで、柚葉はかなり驚いた。まるで、佐助が盗賊業をするのを恐れているような。

「なんだ？仕事しちやいけないのか？」

佐助が優しく聞いても、柚葉は答えない。座ったまま、動かない。ただ、辛そうな顔をするだけだった。

数分間、そうしているだけだった。だが、柚葉は覚悟を決めたようにすつと立ち上がった。

「なんでもない。すまない。いつも、そなたは危険なことばかりしている。わざと見張りの奴等呼び寄せて追われながら盗んだり、挑発したりな。だから、心配だったのだ。だがそれは、私の不要な心配だろう。」

「本当に？そんなはず・・・」

佐助が言い終わる前に言葉はさえぎられた。真剣な目の柚葉に・・・。

「本当だ。心配するな。くれぐれも危険な真似はするなよ。」

ニコツと笑う柚葉。佐助に近付き、そつと、口付けをした。

「・・・柚葉？」

唇が自身の口から離れると、少し、赤くなって小さな声を漏らした。だが、柚葉はその場を走り去っていった。

訳がわからないまま取り残された佐助。唇には優しい感触が残っている。

「黒風が出たぞー！捕らえるー！！」

こころの靄が取れぬまま、盗賊『黒風』となり闇を翔る。柚葉の顔が目、頭に、心に焼き付いている。

ザシユツ

夜空に響く何かを斬る音。斬られたのは『黒風』。闇が少し紅い血に染まる。

「！！！！」

柚葉のことを考えていたせいか右腕を見張りの者にやられてしまった。真っ赤な血が流れゆく。

「くっ・・・今夜は何も盗ってねえぞ？ちっ、しょうがねえ。今日は諦めてやるよ。」

いつでも自信たっぷり盗みも失敗したことがない黒風。初めての敗北に動揺を隠せないらしい。体に傷をつけられる、しかも利き腕をやられるというのは敗北ということだ。もちろん彼の勝手な決め方だが・・・

「しくじったぜ。切り落とされはしなかったが、重傷だ。」

ヒョイと木から木へと飛び移りながら独り言を言っていた。顔は余裕だが、傷の痛みは相当のものだろう。

そして、いつもの場所によく戻ってきた。そして・・・

「ケガしてるんですか？意外ですね。あなたともあるうお方が。」
木の上のほうから声が聞こえた。その人物は軽やかに地面に降り立つ。糸目の温厚そうな青年だ。他の木々からも人があと四人降りてくる。

忍びだ。柚葉に『黒風』の居場所を教えた忍びと同じ忍服だった。

「姫様の言つとおりですね。『仕事の後はここに来る。』」

「姫？」

意識が薄れるなか必死に声を出す。

「柚葉様ですよ。あなたと先刻まで話していたお方です。」

「なっ、柚葉！？うそだろ・・・」

その言葉の先は続かなかつた。忍びの奴等が攻撃を仕掛けてきたのだ。一対五。完全に黒風が不利である。人数でかなりハンデがあるのにそれ以上に黒風は怪我をしている。

「お前ら、卑怯だろ。」

そう言いつつも忍びの身体能力で攻撃をかわしている。

「何とでも呼んでください。あなたを倒すためなら何でもしますよ。」

「相手も負けていない。飛び道具を巧みに操り攻撃していく。」

黒風は避けるだけだ。利き腕が使えないからだろう。

黒風の体力は限界を超えていた。大量の出血が彼の体力を奪ってい

く。

そして彼は倒れてしまった。

忍び達はこの瞬間を待っていたかのようにニヤリと笑った。

「あなたはここでは殺しませんよ。世間をあれだけ苦しめたんです。公開処刑ですよ。」

「ん……」

あれから三日という時がたった。黒風、いや佐助と呼ぶべきだろう。彼は、まだ生きていた。牢獄のなかで……。傷も応急処置程度に包帯が巻かれている。

「？」

佐助は理解できなかった。あの時に殺されたと思っていたからだ。そんな彼に声をかけるものがいた。

「目覚めたか？そなたは公開処刑だそうだぞ？」

この喋り方は……。そう、柚葉だ。牢獄の外から話しかける柚葉。

「柚葉！テメエよく俺の前にその面出せたな。裏切ったくせに……

！約束破ったじゃねーか。」

「……そうだな。そのことは否定しない。」

「殺してやる！」

「殺されるのはそなただぞ。」

佐助の怒りは頂点に達した。柚葉の裏切りと態度の豹変ぶりが気に食わなかった。唇をかみ締め言葉にできない怒りをあらわにする。

「佐助、確かに私はそなたを裏切った。だが、そなたに口付けをした気持ちは嘘ではない。それだけは、わかってくれ。そなたの死刑はもう止められん。」

そして柚葉は去っていった。残された佐助。言葉にならない思いが彼を貫く。辛そうな顔だ。

「なんなんだよ。意味が・・・わかんねえよ!!」
彼の頬を一粒の涙が流れ落ちた。その涙はとてもきれいで、今までに『黒風』が盗んだ宝物よりも光り輝いていた。

処刑当日

処刑はも佐助が斬られる寸前までできていた。処刑場の周りにはたくさんの方がいる。その中には柚葉もいた。ジツと佐助を見ていた。

「黒風、なにか言い残すことは？」

処刑の決まり文句だ。佐助は柚葉を見つめる。

「・・・柚葉、俺は・・・お前を愛してる。柚葉が俺を裏切ったのは何か事情があるんだろう。怒って悪かった。・・・以上だ。」

その瞬間柚葉の目に涙が溢れた。涙でよく見えない。

ザシュツ

そして彼は処刑された。

柚葉は今屋敷を出た。世間一般に『家出』というものだ。なぜ家を出たのか。

『黒風』が盗んでいない宝を盗むためだ。まだ『黒風』のように有名ではないが、これからそうなっていくだろう。

彼女が世間に知られる名は

- 神風 -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8388a/>

染まらない風

2011年1月12日03時00分発行